
正直になれない僕達は

須藤梨紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正直になれない僕達は

【Nコード】

N5168BA

【作者名】

須藤梨紅

【あらすじ】

APT X 4 8 6 9 の解毒剤の開発は不可能になった。

コナンは哀を信じていた。
だけど叶わなかった。

二人は引き裂かれ、また巡り合う・・・

コ哀です。

1 秘密(前書き)

新作です

コ哀です！

なるべく早く投稿しますので、どうか見守っていてくださいー！

1 秘密

ばらばらと白い雪。

今日も私は、隠していたことをあかせずにいた。

「それじゃあ博士、行ってきます。」

「哀くん、気をつけてな。」

あの薬を作り、あなたが被害を受け、解毒剤の開発に努めたけれど
とんでもないことが発覚してしまった。

もうもとは戻れない。

飲んでしまったAPT-X4869は、もともと死に至るほど強力な
もの。

だから、もちろん強い薬品が入っている。

それを解く薬など、まだ開発されていない。

今までのものはそれを和らげるもので、それが完全になくなること
はありえない。

私はこの姿のほうが楽だった。

組織にいたこと、お姉ちゃんをなくしたこと……

宮野志保の姿で起こしたことを、忘れられるような気がして。

だけど彼は違う。

蘭さんのもとに戻るといふ理由があるから。

だからこそ……

「よう、灰原。」

「おはよう哀ちゃん！」

「おはようございます、灰原さん！」

「灰原！今日オレなあ、朝飯うな重もどきだったぜ！」

「元太君……なんですかそれ。」

他愛のない話。

だけど私はそれに溶け込んでいるのだろうか？

「灰原。」

「……ああ、工藤君……」

「どうだ？開発のほう……」

胸が痛む。あなたを傷つけるかもと。

だけど……

「工藤君、よく聞いて。」

1 秘密（後書き）

至らない点があるとおもいますが、読んでくれてありがとうございます
ました

次回はコナンが爆発します。

2 決意して（前書き）

2話目です。険悪なムードですが、いい方向にむけるよう努めますので、
どうか読んでください。><

2 決意して

「工藤君・・・私達は、もう元に戻れないわ。」

前を歩く純粋な小学一年生。何もかも忘れて、楽になれたら。

歩く足がぴたりととまった。

「・・・おい、灰原、冗談だろ？」

「・・・全力は尽くしたわ」

「・・・ツざけんなよっ！」

工藤君の声。それは大きく、周りの人が見た。

「コナン君・・・？」

「ああ、わりイ、みんな・・・今日は先いっててくれ。」

「？はい・・・」

「灰原、どういうことだ？家で話そう。」

私達は一言も交わさぬまま、博士の家に向かった。

「ただいま・・・」

「哀くん！それに新一・・・どうしたんじゃ？」

「博士・・・事情はあとで話すから、今は席をはずしてくれ・・・」

工藤君がいうと、博士はうなずき、自分の実験室に戻った。

2 決意して（後書き）

次回は涙が見えるかもしれませんっ！

3 涙を流しても（前書き）

お気に入りありがとうございますっ
天国へのカウントダウンの話も入ってます。

3 涙を流しても

「灰原・・・話してくれ。」

工藤君に言われ、私は話し始めた。

「もともと、APTX4869に、幼児化するなんていう症状は出ないの。本当は、『摂取した者はしにいたるが、その毒物が体内から検出されない薬』なの。」

だから、一番強力な薬を打ち消せば、解毒できる。

「だけど・・・だけど、組織がTOKIWAのメインコンピュータを爆破したとき・・・あのとき、原は同時に組織のデータを送ってしまった。その時よ。その時に、データは完全に消滅してしまった・・・！」

「・・・まさか・・・そんな・・・」

「私も、それを最近知ったの。それに、戻れたとしても、今まで使った解毒剤の耐性ができてしまった。」

あの薬は和らげる薬だから、すべては打ち消せない・・・だから事実上戻るのは不可能・・・」

「灰原・・・オレ、まだ蘭に何も伝えてないんだ・・・」

新一の姿で！またずっと待たせ続けなきゃいけない！オレが一回でももとに戻れたら・・・！」

「ごめんなさい・・・」

「ごめんなさい！？そんなんですむと・・・すむとおもってんのか・

・・・
オレは蘭を・・・蘭を・・・それがわかんねエのかよ!!」

「工藤君・・・もうどうしようもないわ。だから、もしものために残しておいた、最後の解毒剤・・・
一時的に元に戻るわ。3日間だけ。それで、工藤新一として、最後に・・・」

「・・・うあああつ!あ・・・ああ・・・」

工藤君が声を荒げて泣いていた。
本当に・・・

私は馬鹿だ・・・

「私は急いで解毒剤を作るわ・・・」

まるで逃げるかのように、部屋に戻る。

「・・・最悪だわ。私、好きな人を傷つけて、人生を狂わせた・・・
私が・・・私がすべての発端・・・あ・・・ああ・・・ああ・・・
・・・ッ!」

どうにもならなかった。

3 涙を流しても（後書き）

文字がぐちゃぐちゃですね。許してください。><

4 戻れなくて(前書き)

哀ちゃんのみです！

4 戻れなくて

工藤君から逃げてしまった。

工藤君が泣いていた。あの工藤君が、声を荒げて。私は絶えられなかった。

工藤君が泣いていたことじゃなくて・・・

工藤君が蘭さんのことを想って泣いていた事に。分かっていたのに。

私の気持ちは届かないことくらい。

私の一番の願いは叶わないことくらい。

そう思ったら、受話器をとっていた。

「お姉ちゃん・・・」

目に涙が浮かんだ。私はいそいでプッシュボタンをおした。

「お姉ちゃん・・・私、一番大事な人を傷つけてしまった・・・。

もう取り返しのつかないことになってしまった・・・！

お姉ちゃん、どうして私、こんなことになっちゃったの・・・？

私、工藤君がいたから一人じゃなかったのに！

吉田さんや博士だっていたけど・・・

いつだって心を支えてくれたのは工藤君だった・・・！」

届かないこの気持ちを、誰かに伝えなきゃやっていられなかった。

たとえそれがもういない人でも・・・

「戻れないよ・・・お姉ちゃん、戻れない・・・
お姉ちゃんがいたから頑張れたあのときも・・・
工藤君が隣にいた時も・・・
戻れない・・・もう戻れないの・・・！」

4 戻れなくて(後書き)

次はコナン目線です！コナンファンの方、お待たせしました

5 あふれる涙(前書き)

コナン目線です！

5 あふれる涙

灰原が部屋に行ってしまった。

「おい、新一……」

「ああ、博士……わりいな、大声だしちまってよ……」

「いや、わしはかまわんが、哀君は……?」

「部屋にこもっちまった……」

「……じゃが新一、もともと解毒剤は完成するかは定かじゃなかったんじゃ、哀君を許してやったらどうじゃ?」

「ああ、俺だって、悪いのは灰原じゃないと思った。だけどよ……動いちゃったんだよ、体が。」

どうしてあの薬があったんだろう、なかったら俺と蘭はそばにいれたかもしれないの……」

「新一……」

「俺はアイツをいま、とても許してやれないかもしれない……顔をみたら傷つけるかもしれないだろ?だから、しばらくは顔も合わせらんねえよ。」

「そうか……じゃが、哀君のためにも早く話してやらんな……」

「ああ……わーってるよ……ちょっと一人になりてえんだ。父さんの書籍行ってくる。」

「ああ……」

父さんの書齋。自然と心が安らぐ。

だけど。今日は……

「かーっとなっちまって、涙までみせちゃった。かっこわりいな、俺……」

「ただど……もう蘭に……新一の姿をみせられない……か……」

蘭の笑顔が。

蘭が叱咤の声をあげる顔が。

蘭の涙が。

もう俺の姿で見られない。

「ごめん……蘭……ほんとにつ……俺はお前のそばに……
……蘭の隣に戻ることは、できねえみたいだ……。」

おさえられない涙があふれ、とまらなかった。

5 あふれる涙（後書き）

心理描写がまだ不得意です。
どうか見逃してください。><

6 さよならも告げられない

昨日泣きはらしたせいで、目が赤くはれていた。
工藤君にどんな顔して会えばいいのだろう……。

「哀くん……おきたのか。」

「ええ、博士、昨日はごめんなさい。醜いところを見せてしまったわね。」

「いや、いいんじゃないが、学校へはいけそうか？」

「ええ。支障はないわ。」

支障がないなんて嘘。本当はあなたと会うのが、たまらなく辛い……

「あ、灰原さん！」

「あら、あなた達……江戸川君は？」

「今日は風邪引いたから学校休むって。」

「そう。」

風邪。

本当は解毒剤はとっくに完成していた。

こうなることを想定してつくった最後の薬が。

今使えば効果も持続するかもしれない……

昨日のことがあって、俺は明日、蘭と最後のデートをするつもりだった。

もし蘭に江戸川コナンの正体が工藤新一だと知ったとしても、恋人にはなれない。

それなら、もう別れを告げてしまったほうが楽。

それに……

その時、蘭から電話がかかってきた。

変声機ごしの声。この声を使って、何度だましてきただろう……。

6 さよならも告げられない(後書き)

次は6時ごろに投稿の予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5168ba/>

正直になれない僕達は

2012年1月15日03時48分発行